

楠木正家と瓜連城址

那珂市歴史民俗資料館



瓜連地方は、鎌倉時代には二階堂氏の支配から北条氏の本家（得宗家）の所領となった。それにより、執権北条時頼の5男桜田禪師時厳とくとしおよび禪師の子貞国（瓜連備前入道、北条時宗の子）が支配し、貞国の下に沙汰人と呼ばれる下役人が置かれていた。その後、元弘3年（1333）6月、後醍醐天皇の「建武の新政」が成り、北畠親房の子顕家は陸奥鎮守府将軍として義良親王を奉じて多賀城に赴いた。常陸国国司には楠正成が任命され、やがて正成の一族である（諸説あり）楠木正家が代官として瓜連城に入ることになる。建武2年（1335）7月、北条氏の遺児時行が鎌倉を攻める「中先代の乱」が起こったが、足利尊氏がこれを破った。これ以降、尊氏は新政権に背いて、やがて幕府を開く策に出る。

延元元年（建武3年／1336）1月から2月にかけて瓜連城に楠木正家が入った（『関城繹史』）。瓜連城は、東国における南朝方の勢力分布からみると、筑波山麓から東北白河や多賀城とを結ぶ中間点に位置し、重要な城であった。当時の常陸における南朝方は、筑波の小田氏をはじめその周辺には関氏・大宝下妻氏、真壁氏・笠間氏がおり、那珂地域では楠木正家を中心として那珂川沿いに那珂通辰や戸村氏がいた。東北地方では、白河の結城親朝や多賀城の北畠顕家がいた。

一方の北朝方は、太田の佐竹貞義・義篤父子および義篤の弟義春を主体として、相馬胤頼や陸奥国の伊賀三郎盛光らがその周辺を形成していた。

この両勢力の戦いについて、延元元年（1336）2月には佐竹貞義の子六郎義冬が討ち死にしている。8月には久慈川沿いの花房や大方河原において合戦し、正家は佐竹勢を破る奮戦をしている（世にいう瓜連合戦）。これより先の5月、尊氏は後醍醐天皇方の新田義貞や楠正成を湊川に破り、8月には光明天皇を擁立した（北朝）。11月にはいわゆる足利幕府を開き、12月には後醍醐天皇が京都から吉野に移り南北朝の分裂となった。

楠木正家の出自は明らかではなく、正成の甥として関西から派遣された説がある。しかし、一大勢力の佐竹氏を相手におよそ1年間にわたる合戦を展開することは容易なことではない。正家はもともと桜田貞国の被官として瓜連地域にかなりの勢力を持っていたとも推定されている。

12月2日、武生城たきゅうじょう（常陸太田市）を發った佐竹勢は瓜連に向かい、12月10日岩出河原で激戦、瓜連勢は小田・広橋・那珂軍の加勢を受けてもかなわず、翌11日遂に落城した。楠木正家は、脱出して奥州へ向かい鎮守府将軍北畠顕家の軍に加わり、後に正平3年（1348）1月楠正成の子正行とともに四条畷（大阪府）で討ち死にした（『大日本史』列伝巻169）。瓜連城には興国元年（1340）から翌年にかけて尊氏の側近こうのもろふゆ高師冬が陣所として入ったが、師冬が引き揚げた後は廃城となった。

瓜連城の遺構は、現在常福寺が建っている本丸を中心に土塁と堀がよく残っており、町内にもその痕跡は見られ、その広さは東西それぞれ約700メートルの規模である。一部に坑道の跡と思われる遺構も見られ、楠正成の拠った大阪府の千早城や茨城県の関城（筑西市）に類似しているともされる。ただ、この瓜連城は楠木正家が1年足らずの合戦の間に築城したのではなく、その前の桜田貞国の時に構築され、それを正家が修築したものと思われる。

